World's Famous Classics

47

世界文学全集

Л.Н. Толстой

АННА КАРЕНИНА I

トルストイ／藤沼貴訳

アンナ・カレーニナ I

世界文学全集——47

トルストイ

1976年4月24日第1刷発行

訳者　藤沼　貴

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

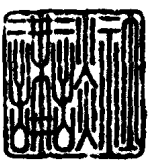
電話　東京 03(945)1111(大代表)

振替　東京 3930

製版所　株式会社まゆら美研

印刷所　豊国オフセット株式会社

製本所　株式会社堅省堂



© KODANSHA 1976 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
定価はカバーに表示してあります。(文3)

目次

第一編……7
第二編……143
第三編……281
第四編……415
解説・主要作品解題……481

写真撮影＝大橋徹夫
装幀＝アド・ファイブ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

『アンナ・カレーニナ』主な登場人物

アンナ――高官カレーニンの妻で、優雅と美貌にあふれた女性。オブロンスキー家の夫婦げんかの仲裁の折り、ウロンスキーと知りあってからは、愛児セリョージャへの愛に悩みながらも、「仕事の鬼」の夫をすて、彼との激しい恋に生きようとする。

カレーニン――世間体だけを気にし、妻の不貞に接しても、離婚を認めぬ冷酷な官僚。

ウロンスキー――富裕で社交的な青年将校で伯爵。アンナの不思議な魅力のとりことなり、宿命の恋をいちずにつき進む。

レービン――理想主義的な田舎の地主貴族で、キティにひそかな恋心をよせる。

キティ――シチェルバーツキー公爵家の末娘。ウロンスキーにあこがれ、傷ついたのち、レービンの純愛を受けいれる。

オブロンスキー――アンナの兄で、自由主義的な貴族。浮気っぽいが、根は好人物。

ドリー――キティの長姉。夫オブロンスキーの浮気に悩みつつ子どもの養育に腐心する。

コズヌイシェフ――レービンの異父兄で、独身。作家、哲学者として有名。

ニコライ――レービンの実兄。放蕩無頼の生活で財産を使いはたし、胸を病んでいる。

マーシャ――ニコライの内縁の妻。

アガーフィヤ――レービン家のばあや。

アンナ・カレーニナ

(I)

復讐はわたし〔神〕のすることである、
だから、わたしが報復しよう。

第一編

一

幸福な家庭はみなおたがいに似かよっており、不幸な家庭はそれぞれその家なりに不幸である。

オブロンスキー家では何もかも混乱していた。夫が以前自分たちの家に住みこんでいたフランス女の家庭教師と関係していたのを妻が知って、あなたとおなじ家で暮らしてゆくことはできない、と夫に宣言してしまったのだ。その状態がもう足かけ三日つづいており、それが当の夫婦にも、家族一同にも、召使たちにも痛切に感じとられていた。家族や召使はみんな、自分たちがいっしょに暮らしているのは意味がない、どこの宿屋で偶然いっしょになった人たちでも、自分たち、オブロンスキー家の家族や召使より、もっとおたがいにむすびついている、と感じていた。妻は自分の部屋から出ようともせず、夫は足かけ三日家にいなかった。子供たちはおちつきをうしなったように、家じゅうかけずりまわっていた。イギリス女は女中頭とけんかをしてしまい、あたらしい勤め口をさがしてほしいと、友だちに手紙を書いた。コックはもうきのうのうちに、それも食事どきに、家を出たきりだった。下働きの料理女と御者は暇をくれと申し出ていた。

けんかをしてから三日めに、ステパン・アルカージッチ・オブロンスキー公爵――世間のよび名ではスチーワ――は、いつもの時間、つまり、午前八時に妻の寝室ではなくて、自分の書斎の山羊皮のソファーの上で目をさました。かれはもう一度ゆっくり寝なおすつもりのように、肉づきのいい、のうのうと育った体を、ソファーのスプリングの上で寝がえらせ、反対側からしっかり枕をだきしめて、それに頬をおしつけた。しかし、急にとび起きると、ソファーの上にすわって、目をあけた。

《そう、そう、どうなってたんだったかな？》かれは夢を思いだしながら、考えた。《そう、どうなってたんだったかな？　そうだ！　アラービンがダルムスタット（イツ西南部の都市）で食事の会をしようとしていたんだ、いや、ダルムスタットじゃなくて、なんだかアメリカみたいだった。そうだ、でも、夢のなかじゃダルムスタットがアメリカにあったんだ。そう、そう、アラービンがガラスのテーブルで食事の会をしようとしてた、そうだ――すると、テーブルが『わたしの宝（イル・ミオ・テソロ）』をうたったんだ、いや、『わたしの宝』じゃなくて、もっとましなものだった、

それに何か小さなガラスびんがたくさんあって、そいつがなんと女なのさ》と、かれは思いだした。

オブロンスキーの目はたのしそうに光りだした、そして、かれは微笑をふくみながら、思いにふけった。《そうだ、すばらしかったな、実にすばらしかった。夢にはもっとたくさんすてきなことがあったんだが、口では言えやしないし、頭のなかじゃ、目がさめてからだって、うまくまとめられやしない》そして、ラシャのブラインドのわきからもれている光の筋に目をとめると、かれはたのしそうに足をソファーから投げ出し、妻が縫ってくれた（去年の誕生祝の）、金色の山羊皮でかざったスリッパを足でさぐりだし、古い、九年間の習慣で、すわったまま、自分の寝室ではガウンの掛かっていた場所に、手をのばした。そのとたんに、かれは急に、自分がどうして、なぜ妻の寝室ではなくて、書斎に寝ているのかを思いだした。微笑が顔から消えて、かれはひたいにしわを寄せた。

《ああ、ああ、ああ、ああっ！　……》かれは今まであったことをのこらず思いだしながら、うめいた。すると、かれの脳裏にまた、妻との口論の端々や、絶体絶命な自分の立場や、それに、何よりつらいことに、自分自身の罪がのこらず、うかびあがってきた。

《そうだ！　あいつはゆるしてくれないだろうし、ゆるすこともできまい。それに、いちばんやりきれないのは、いっさいの原因がおれで――原因がおれだのに、おれがわるいわけじゃないということさ。悲劇は何もかも、要するにここにあるんだ》かれは思った。《ああ、ああ、ああ！》かれはうめき声をまじえながら、あの口論のなかで自分がいちばんつらく感じている所を、途方にくれて思いだした。

いちばん不愉快なのは最初の瞬間だった――かれが劇場から、うきうきして、上きげんで、妻のために特大のナシを手に持って帰ってくると、妻の姿は客間に見あたらなかった。妙なことに、かの女は書斎にも見あたらず、やっと見つかったのは寝室で、手にはわざわいのもととなり、何もかもさらけ出してしまった手紙がにぎられていた。

かの女が――いつも気苦労ばかりして、こせこせしてもいるし、頭もつよくない、とオブロンスキーが思っているドリーが、手紙をにぎってじっとすわったまま、恐怖と、絶望と、怒りを顔に出して、かれを見つめていた。「何ですかこれは？　これは？」かの女は手紙をゆびさしながら、たずねた。

そして、それを思いだすと――よくあるように――オブロンスキーは出来事そのものよりむしろ、妻のそのことばにたいする自分の反応のしかたの方が、苦になった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

その瞬間かれは、何かあまりにも恥ずかしいことを不意にあばかれたとき、人がやるようなことを、ついやってしまった。かれは自分の罪をあばかれた今、妻にたいしてとることになった立場にふさわしい顔つきを、とりつくろうことができなかった。腹を立てたり、否定したり、言いわけをしたり、ゆるしをもとめたり、せめて知らん顔をしたままでいるかわりに――なんでも、かれがしたことよりましだったのに！　――かれの顔はまったく無意識に（《脳の反射作用だ》と、生理学の好きなオブロンスキーは思った）、まったく無意識に、いきなり例の、人がよさそうで、しかもそのために、まのぬけた微笑をうかべてしまったのだ。

そのまのぬけた笑顔を、かれは自分にゆるすことができなかった。その笑顔を見ると、ドリーは、肉体的な痛みを感じたように、身ぶるいをし、もともとカッとなる気性だったので、一気にひどいことばをあびせかけると、部屋からとび出してしまった。そのときから、かの女は夫と顔をあわせようとしなかった。

《何もかも原因はあのまのぬけた笑い顔なんだ》とオブロンスキーは思った。

《しかし、いったいどうすればいいんだ？　どうすればいいんだ？》途方にくれてかれは胸のなかで言った、そして、答えは見つからなかった。

二

オブロンスキーは自分自身にたいしては正直な人間だった。かれは自分をあざむいて、おれは自分の行為を後悔している、と自分に信じこませることはできなかった。三十四歳の、美男で、惚れっぽい男の自分が、生きている五人の子と、死んだ二人の子の母親で、自分よりひとつしか若くない妻に惚れていないことを、かれは今になって後悔することはできなかった。かれが後悔していたのは、もっとうまく妻にかくす才覚のなかったことだけであった。しかし、かれは自分の立場のつらさを重重感じていたし、妻と、子どもたちと、自分がかわいそうだった。あのことを知って、妻がこれほどショックを受けると予想していたら、かれは自分の罪をもっとうまく妻にかくすことができたかもしれない。かれははっきりこの問題を考えたことは一度もなかったが、自分が妻に潔白でないことを、かの女はずっと前から察していて、それを見て見ないふりをしているのだろうと、漠然と感じていた。やつれはて、年をとって、もう器量のわるい女で、何ひとつ目だたない、平凡な、ただやさしい一家の母親にすぎないドリーは、公平な気持からいって、当然寛大でなければならないという気さえ、かれはしていた。実は、まるで反対だったのだ。

《ああっ、ひどい！　ああ、ああ、ああ！　ひどいよ！》オブロンスキーは胸のなかでくりかえしながら、何ひとつ考えつくことができなかった。《あのときまでは、何もかも本当にうまくいっていたのにな、おれたちの生活は本当にうまくいっていたのになあ！　ドリーは子どもに満足して、しあわせだった、おれは何ひとつあいつのじゃまをせずに、好きなように、子供や家事にうちこませておいた。たしかに、あの女がうちの家庭教師だったことはよくない。よくないさ！　自分のうちの家庭教師をくどくなんて、何となくけちくさくて、品がない。それにしても、たいした家庭教師だったな！（かれはマドモアゼル・ロランの黒い、思わせぶりな目とその笑顔を、ありありと思いだした）。しかし、あの女がうちにいるあいだは、おれは何もしないようにしてたじゃないか。いちばんまずいのは、あの女がもう……運わるく、何もかもかさなるなんて、たまったもんじゃない！　ああ、ああ、ああ！　ともかく、どうする、どうすりゃいいんだ？》

答えはなかった、あるのはただ、いちばん複雑で解決できないすべての問題に、人生があたえてくれる一般的な答えだけだった。その答えは――その日の欲求にすがって生きていくこと、つまり、我をわすれることが必要だ、というものであった。夢で我をわすれることはもうできない、すくなくとも夜までは、ガラスびんの女たちがうたった音楽にもどることは、もうできないのだ。とすれば、現実の夢で我をわすれなければならない。

《そのうちはっきりするさ》オブロンスキーは腹のなかでそう言うと、立ちあがって、ライト・ブルーの絹の裏のついたグレーのガウンをはおり、ひもの房をむすんでうしろにかけた、そして、ひろい胸の箱にじゅうぶん空気をつめこむと、肉づきのいい体をいとも軽々とはこんでいくがに股の足を、ふだんのとおり元気よく動かして、窓にあゆみ寄り、ブラインドをあげ、大きな音でよびりんを鳴らした。よびりんに応じてすぐに、昔からの親友――側仕（そばづか）えのマトベイが、服と、長靴と、電報を持ってはいってきた。マトベイのあとから、ひげそりの道具を持って床屋もはいってきた。

「役所から書類がきてるか？」オブロンスキーは電報を受けとって、鏡にむかってすわりながら、きいた。

「テーブルの上に」とマトベイは答えて、たずねかけるように、気がかりそうに主人の方を見た、そして、しばらく間をおいて、いわくのありそうな微笑をうかべながら、言いそえた。「馬車屋のおやじから使いがまいりました」

オブロンスキーはひとことも答えず、鏡のなかのマトベイを見やった。鏡のなかで出会った視線で、ふたりが

たがいに理解しあっていることがわかった。オブロンスキーの目はこうたずねているようであった――《そんなことを、なんで言うんだ？　お前がわからないわけはあるまい？》

マトベイはみじかい燕尾服のポケットに両手を入れ、片足を横の方に出して、無言で、気のよさそうに、ちょっとふくみ笑いをしながら、主人を見た。

「次の日曜に来るように言いつけておきました、それまでは、あなたさまにも、馬車屋にもむだな迷惑をかけませんように」かれは用意しておいたらしいことばを言った。

オブロンスキーはマトベイがちょっと冗談を言って、自分を相手にしてもらいたかったのだなとさとった。電報の封をきると、かれは例によって打ち違えたことばを、勘で修正しながら読みおわった。すると、かれの顔はすっかりあかるくなった。

「マトベイ、妹のアンナがあした来るよ」かれは、ながいちぢれた頬ひげのあいだのバラ色の道をきれいにしている床屋の、つやのいい、ふっくらしたちいさな手をちょっと止めて、言った。

「ありがたいことで」マトベイはこの返事で、自分が主人とおなじように、この訪問の意味を理解しているのを見せながら、言った――その意味というのは、オブロンスキーのお気にいりの妹アンナなら、夫婦の仲直りの役に立てる、ということであった。

「おひとりさまで、それともご主人さまとごいっしょで？」マトベイがきいた。

床屋が上くちびるをやっていたので、オブロンスキーは口がきけずに、指を一本立てた。マトベイは鏡のなかにむかってうなずいた。

「おひとりさまで。二階に支度をいたしますか？」

「奥さんに知らせてみろ、どこにするか言いつけてくださるだろう」

「奥さまに？」ふに落ちないように、マトベイがおうむがえしに言った。

「そうだ、知らせてこい。それから、この電報を持っていって、奥さんのおっしゃったことを、おれにつたえるんだ」

《ためそうというわけだな》とマトベイはさとった、しかし、かれはこう言っただけであった。

「かしこまりました」

オブロンスキーがもう顔を洗ってもらい、髪もとかしてもらって、服を着ようとしていたとき、マトベイが皮のきしむ長靴をゆっくりふみしめながら、電報を手にして、部屋にもどってきた。床屋はもういなかった。

「奥さまは出ていかれる、とおつたえせよとのご命令で

ございます。あの人の、つまり、あなたさまの、お気に召すようにしていただけばよいとのことで」かれは目だけで笑いながらこう言うと、手をポケットに入れ、首を横にかしげて、主人を見つめた。

オブロンスキーはしばらくだまっていた。それから、人のよさそうな、ちょっと情けない微笑が、その美しい顔にうかんだ。

「え？　マトベイ？」かれは首をふりながら言った。

「大丈夫でございますよ、だんなさま、まるくおさまります」マトベイが言った。

「まるくおさまる？」

「ええ、そうでございますとも」

「お前、そう思うか？　だれだ、そこにいるのは？」オブロンスキーはドアのかげに女のきぬずれの音をききつけて、たずねた。

「あたくしでございます」しっかりした、感じのいい女の声が言った、そして、ドアのかげから、ばあやのマトリョーナのいかつい、あばたの顔がのぞいた。

「なんだい、マトリョーナ？」オブロンスキーはかの女の方にむかって、ドアを出てゆきながら、たずねた。

オブロンスキーは妻にたいして、何から何までわるかったし、自分でもそれを感じていたのに、家の者はほとんどみんな、ドリーの大事な友達のばあやまでが、かれの味方であった。

「なんだい？」かれは元気なく言った。

「あちらに行って、だんなさま、もう一度あやまってごらんなさいまし。ひょっとすると、うまく行くかもしれません。とても、苦にしておられましてね、見ているのも切ないほどで、おまけに、家じゅう何もかもでんぐりがえって。あやまってごらんなさい、だんなさま。しかたがないじゃございませんか！　たのしみがあれば……」

「でも会ってくれまい……」

「それでも自分のすることは、なさいまし。神さまはお慈悲ぶかいものですよ、神さまにお祈りなさい、だんなさま、神さまにお祈りなさいまし」

「よし、わかった、さがっていい」オブロンスキーは急に赤くなって、言った。「よし、そいじゃ着がえをさしてくれ」かれはマトベイにそう言うと、思いきりよくガウンをぬぎすてた。

マトベイは、何か目にもつかないものを吹きはらいながら、もう首輪の形にととのえたシャツをささげ、いかにも満足そうにそのシャツに、のうのうと育った主人の体をつつんだ。

三

着がえがすむと、オブロンスキーは香水をふりかけ、

シャツの袖を直し、習慣になった動作であちこちのポケットにタバコ、紙入れ、マッチ、二重のくさりと下げ飾りのついた時計をおしこんだ、それから、ハンカチをサッとひとふりすると、自分が清潔で、いいにおいがして、健康で、不幸はあっても、肉体的にたのしいのを感じながら、一歩ごとにちょっと体をゆすって食堂にはいった。そこではもう、コーヒーがかれを待ちうけており、コーヒーの横には、手紙と役所からの書類があった。

かれは手紙を読んだ。一通はひどく不愉快なもので――妻の領地の森を買おうとしている商人からだった。その森はぜがひでも売らなければならなかった。が、今のところ、妻と仲直りをするまで、それを話題にするわけにはいかなかった。この場合、何よりも不愉快なのは、このために、これからしなければならない妻との和解に、金銭的な利害がからんでくることだった。そして、自分はその利害に支配されるかもしれない、自分はこの森を売るために、妻との和解をもとめるだろう、という考えが、かれをいやな気持にさせるのだった。

手紙をかたづけると、オブロンスキーは役所からの書類をひき寄せ、二組の文書をすばやくめくり、大きな鉛筆でいくつかしるしをつけた、それから、書類をおしやって、コーヒーを手にとった。コーヒーを飲みながら、かれはまだしめっている朝刊をひろげて、それを読みだした。

オブロンスキーは自由主義的な、つまり、過激ではなくて、大半の人間が支持している傾向の新聞をとって、読んでいた。そして、学問にも、芸術にも、政治にも、本質的には、関心がなかったくせに、こういったあらゆることがらにたいして、大半の人間と自分の新聞がもっている考えを、しっかりまもっていた、そして、大半の人間が考えをかえたときにはじめて、考えをかえるのだった、いや、もっとただしく言えば、考えをかえるのではなく、考えそのものがかれのなかでいつのまにかかわってしまうのだった。

オブロンスキーは主義も、考え方もえらびとるのではなく、その主義や考えの方がひとりでにかれのところにやってくるのだった、それは、かれが帽子やフロック・コートの型をえらぶのではなく、みんなが身につけているのを買うのと、ちょうどおなじだった。それに、考えをもつということは、一定の社会に生きているオブロンスキーにとっては、たいてい一人前の年になれば発達してくる、多少の思考活動の欲求がある以上、帽子を持つのとおなじように、ぜがひでも必要だった。かれが保守主義より（こちらを支持している者も、かれの階層ではやはり多かった）、リベラルな傾向をこのんだ理由がかりにあったにしても、それはかれがリベラルな傾向の方を

合理的と見ていたからではなく、その方が自分の生活形態にふさわしかったからだった。リベラリスト一派は、ロシアでは何もかもだめだ、と言っていた、そして、事実、オブロンスキーには借金がたくさんあって、金がどうしてもたりなかった。リベラリスト一派は結婚とは時代おくれの制度であり、それを改革しなければならない、と言っていた。そして、事実、家庭生活はオブロンスキーにほとんど満足をあたえてくれず、かれの本性にまったく反したうそや見せかけをせざるをえないようにしていた。リベラリスト一派は、宗教は国民の未開な層の歯止めにすぎない、と言っていた、いや、もっと正確に言えば、そうほのめかしていた、そして、事実、オブロンスキーはみじかいお祈りの儀式でさえ、しまいまで辛抱していると足が痛くなったし、この世でも生きているのはずいぶんたのしいはずだのに、なんのために、あの世について、ありとあらゆる、あんなおそろしくて、ものものしいことばが必要なのか、理解できなかった。それにまた愉快な冗談の好きなオブロンスキーは、血統を自慢するのだったら、リューリク（年代記の伝説で、ノヴゴロド公国の創建者とされている人物）に止まっていて、いちばんはじめの祖先であるサルをみとめないのはけしからんといって、ときどき穏健な人を困らせるのがたのしかった。そんなわけで、リベラルな傾向はオブロンスキーの習慣になっており、頭のなかにつくり出してくれる、ほのかなもやのために、かれは食後の葉巻とおなじように、リベラルな新聞が好きだった。かれは社説を読んだ、そこにはこんな説明があった――急進主義が保守的な要素をすべてのみつくす危険があるとか、政府は革命怪獣弾圧のために対策を講じる義務がある、などといった悲鳴が、いわれもなくあげられている、ところが、逆に、《われわれの意見によれば、危険は架空の革命怪獣にではなく、進歩にブレーキをかける因習主義の頑迷さに、ひそんでいる》云々。かれはもうひとつの論文も読んだ、それは財政面のもので、ベンサムやミルのことに触れ、大蔵省をチクリと皮肉っていた。もちまえの頭の回転の早さで、オブロンスキーはどんなあてこすりの意味でも、それがだれから、だれに、どんなきっかけでむけられたものか――さとった、そして、それがいつもきまって、ちょっとした満足感をあたえてくれるのだった。ところがきょうは、マトリョーナの忠告や、家のなかがすっかりみだれていることを思いだすと、その満足感がそこなわれてしまうのだった。かれはベイスト伯爵（一八〇九～一八八六。オーストリア・ハンガリー首相。ビスマルクの政敵だった）が、噂によると、ビスバーデン（ブロシアの保養地）に行ったということも、もう白髪とはお別れだという広告も、軽便箱馬車の売出しも、若い女性の求職も読んだ。しかし、そんなニュースは以前のように、かれにひそやかな、皮肉な満足をあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo